ソリマーノの段（一）
――『解放されたエルサレム』第八歌全体と第九歌冒頭の訳――

Solimano narrato nei canti 8,9,10 della *Gerusalemme liberata* (1)

水野留規
MIZUNO, Ruki

La figura più impressionante dei canti 8,9,10 è senza dubbio Solimano, il capo dei preditori arabi, venuto a Gerusalemme per partecipare alla guerra contro l'esercito cristiano. Nel numero 44 del nostro Kiyo, ho riportato la mia traduzione del canto 7, e questa volta traduco il canto 8 e l'inizio del canto 9, vale a dire, la prima parte dei canti di Solimano. I lettori si accorgerà del cambiamento del tono della poesia; qui siamo quasi nel mondo romanzesco, ricco di scene orrende, misteriose e diaboliche (a differenza del canto 7 che conteneva le scene idilliche e cavalleresche).

キーワード：　悪魔 diavolo、剣 spada、ソリマーノ Solimano

第八歌訳（〔　〕は筆者の筆による補足説明、原文は伊語韻文、原作は全二十歌で、一五八一年刊）－

〔一〕漸く雷と暴風雨の猛威が去り、南風と北風の吹き込みもなくなると、薔薇色の額と金色の足を持つ曙が天の館から姿を現した。だが嵐を先程まで呼び起こしていた悪魔たちは尚も邪悪な術を用いようとしたのであり、その中の一人、アストラゴッレと称する悪魔が、仲間の魔物アレット[1]に向かって言う。

〔二〕「見よ、アレット。一人の騎士が（我々に進路を塞がれることなく）やって来るのを。奴は我々の帝国の守護神である者[2]の刃を受けずして生きてここまで逃げてきた。奴が自らの指揮官と仲間たちの痛ましい最期についてフランク人たちに語るならば、事は重大だ。ベルトルドの息子〔リナルド〕が〔キリスト教軍に〕呼び戻されるということがありうるからだ。

〔三〕察せよ、それが如何に危うい結果をもたらすかを。我々は力と策略をもって、それを阻止しなければならないのだ。さればフランク人の陣営に侵入して、奴がフランク人の利益のために言うことを、フランク人の破滅の種にするのだ。ラテン人やヘルヴェティアやブリタニア人の血液に炎の種と毒を注入し、紛争や反乱を引き起こして、キリスト教軍全体が混乱に陥るように計らうのだ。

〔四〕おまえこそはこの仕事の適役だ。われらの王[四]の前でおまえ自身が殊勝にもそう宣言したではないか。」アストラゴッレの言葉は、凶暴なる魔物を唆して、任務に取り掛かからせるには十分であった。そのころアストラゴッレによって語られた騎士[五]がキリスト教徒たちが駐屯する谷のところへ着き、かれらに向かって叫ぶ。「お願いです、兵士の皆さん。どなたか私を司令官のもとへ連れてください。」

〔五〕多くの兵士たちがこの異邦の騎士の話を聞こうとして、司令官の前に進もうとする彼に付き添った。騎士は司令官の前で一礼すると、異教徒たちを震撼させるその手に接吻して言った。「閣下、あなたの名声は大海や星の彼方にまで届いておりますが、私は閣下のもとに朗報をもって来ることを願っておりました。」そう言うと溜息をつき、さらに述べた。

〔六〕「デンマーク王の一人息子であり、その老齢なる王の誇りであり頼りでもあるズヴェーノ[六]は、あなたの呼びかけに応じて、自らもキリストのために戦う軍団に加わろうとしました。高潔な魂に宿ったその気高い志は、苦難や危険に対する怖れによっても、王冠を抱く望みによっても、老王への孝行心によっても、揺るぐことがなかったのです。

〔七〕かれを突き動かしたのは、高貴な師と仰ぐあなたから、難敵攻略の戦術を学びたいという願いでした。かれは自らが名を上げていないことを恥じ入り、そのことで少し苛立っていたのですが、それは少年のうちから立派な功を立てているリナルドの名を、いたる処で耳にしていたからです。しかしかれが出征した一番の理由は、地上ではなく、天における名誉を得ようとしたからでした。

〔八〕そのためにかれは一刻を惜しんで準備を整え、勇猛で屈強な武者を選りすぐって軍団を組織すると、トラキアに向かって行軍を開始し、〔ビザンチン〕帝国の首都を目指したのでした。ギリシャ人皇帝はかれを自らの宮殿に迎えたのですが、閣下の命を受けた使者もやがてそこに到着したのです。この使者からズヴェーノはアンティオーキア国が〔ペルシャ軍に〕如何にして襲撃され、如何にして反撃したかを、

〔九〕すなわち、自国のすべての男を徴兵したと思われるほど多くの軍勢を送ってアンティオーキア攻略を試みたペルシャ国の軍勢を押し返した次第を聞いたのです。使者は話の中で閣下や他のキリスト教徒にも触れましたが、リナルドについてはとりわけ長々と、その勇ましい壮途のことや、あなた方の軍に加わった後の武勲のことを語りました。

〔十〕そしてフランク軍がすでにエルサレムの街に着き、攻め込んでいるということに話が及んだとき、せめて勝利を決定づける最後の攻撃にかれも加わる気はないかと、かれに尋ねたのです。雄々しきズヴェーノは、使者の誘いに心を強く動かされ、自らが敵軍に斬りこんで敵の返り血を手に浴びるその時まで、一時間という時間が五年の長さをもって流れていくように感じました。

〔十一〕他のキリスト教軍兵士に対する称賛は、自らの臆病に対する非難と聞こえ、かれはやるせない気持ちになりました。留まることを勧められても聞き入れず、そう求められても従いませんでした。かれにとっては、閣下の身を護るべきときや、閣下の勝利を称えるべきときに閣下に寄り添えないことが重大、かつ唯一の危険だったので、他の危険は危険にも、怖れるにも値しなかったのです。

〔十二〕私たち兵士が追い立てられている運命を、かれは自ら駆り立て、導こうとしました。それゆえ新たな日の暁の光が射すと、ただちに行軍を再開したのです。もっとも短い行路が最善の行路とされ、そう決めたのは我々の主君であり、指揮官であるかれ自身でした。敵が潜んでいるかもしれない道も、過去にキリスト教軍が蹂躙した町も、かれは避けようとしませんでした。

〔十三〕われらの軍はある時は食糧不足に、ある時は悪路に、ある時は暴力に、ある時は奇襲に悩まされましたが、あらゆる困難を克服し、敵を壊滅させるか、さもなければ敗走させました。或る日我々はパレスチナの国境から遠くない土地に駐屯していたのですが、それまでの勝利は我々をして危険に対する注意を怠らせ、我々が幸運に守られているという妄想を抱かせるようになっていました。

〔十四〕その駐屯地に偵察兵たちが戻ってきて、武器が発する大きな音を聞いたことや、敵の軍旗や幟を目にしたことを述べ、近くに敵の大軍がいると断言したのです。われらの勇敢な指揮官は覚悟を決め、顔色を曇らせず、その表情や声音を変えることもありませんでしたが、この恐ろしい報告を聞いた兵士たちの顔は青白く染まっていきました。

〔十五〕すると指揮官が言ったのです、《おお、今こそはわれらに殉教もしくは勝利の冠が授けられる！余はむろん勝利の冠を望むが、殉教の冠でも喜んで受けよう、それは栄誉には変わりなく、むしろ価値は大きいのだから。おお兄弟たちよ、われらが立っているこの野原は、永遠に記憶される聖域となり、将来ここにはわれらの墳墓が建設され、われらの戦利品が展示されることになるのだ。》

〔十六〕こう述べると、続いて歩哨たちを集め、各人に役務や労苦を分配しました。皆に武装して休むように命じ、自らも武具と鎧をつけたまま横になりました。夜が深まり、眠りと静寂にとって何よりも愛おしい丑三つ時にさしかかったまさにその時、天にも地の底にも届くほど大きな荒々しい叫び声が聞こえたのです。

〔十七〕《武器をとれ、武器をとれ！》との怒声が響くなか、武具で身を固めたズヴェーノは他の者たちに先んじて突進し、その燃えるような眼と赤く火照った顔は威厳で満ちていました。見よ、敵が襲ってくる、大軍がわれらを取り囲み、四方八方から攻め寄ってくる。周りには槍と剣の森があるぞ、上からは空を覆う雲のような矢が降ってくるぞ。

〔十八〕劣勢を強いられたわれらの軍は（何しろ来襲した敵はわれらの軍の二十倍の数でした）、暗い大気にまぎれて攻めてくる敵の刃を受けて、多くの負傷者を出し、多くの者が落命しました。戦場は闇に覆われていましたので、負傷者や死者の数を知ることはできませんでしたが、夜はわが軍の損害を包み隠したばかりか、兵士たちの武勇をも葬ってしまったのです。

〔十九〕しかしズヴェーノは他の者より頭を高くもたげていたので、

ひときわ目立っていました。暗闇の中で目を凝らしていた人は、並外れた力を発揮して奮闘するかれを、すぐに見つけられたのです。かれの周りでは血の河が濠となって流れ、死んだ兵士たちが積み重なって堤防を成していました。四方八方の敵に襲いかかるかれは、眼に恐怖を宿し、手には死を携えているかのようでした。

〔二十〕夜明けの陽光を受けて空が赤らんでくるまで、戦いは延々と続けられました。しかし死の恐怖を覆い隠していた不気味な夜が駆逐され、待ち望まれた光によって悲痛きわまる残酷な光景が露わになると、我々はいっそう大きな恐怖に襲われました。というのも、戦場に累々と横たわる死者たちを見て、われらの軍がほぼ壊滅したことを知ったからです。

〔二十一〕生き残ったのは二千人のうちの百人でした。大量の流血と多くの死者を目の当たりにし、物怖じしないズヴェーノとても、惨状に心を痛め、弱気にならなかったはずはありません。しかし、かれはそういう態度は見せず、大きな声で叫んだのです。《我々も続こう、これらの勇敢な仲間たちに。かれらは自らの血で、地獄の湖沼から遠く離れた天国へと通じる道をわれらに示したのだ。》

〔二十二〕こう言うと、迫りくる死を心のうちで、また全身で（私が見たところ）歓迎するかのごとく、激しく鼓動しつつも覚悟を決めた己の胸を卑劣な蛮族に向けて突き出しました。鋼鉄製は言うに及ばず、金剛石製の頑強な鎧でも耐えられないほどの激しい打撃を受けて、かれは戦場を自らの血で水浸しにし、傷で埋め尽くされたかれの体は全体が赤く染まりました。

〔二十三〕肉体の力ではなく、魂の力が、飽くことなく勇敢に戦う屍同然の男を支えていました。受けた太刀には太刀を返し、傷つけられると譲歩するどころか、ますます攻撃的になりました。その時でした、物凄い形相をした強面の大男が怒り爆発させてかれに襲いかかったのは。果てることがないと思われた両者の戦いは、多くの者に助けられた大男に軍配が上がりました。

〔二十四〕無敵の若武者はかくして敗れ（ああ痛ましい最期）、その仇を討てる者は我々の中にいませんでした。ああ、わが主君の義なる血と高貴な骨よ、どうか証してくれ、あの時私がおのれの命を惜しんだのではなかったことを。私が剣を捨てたのでも、わが身を護ろうとしたのではなかったことを。もし天が私の死を望み給うたのであれば、私は良き死を得るに値する勲功を立てていたことを。

〔二十五〕息絶えた仲間たちの群れの中に、私はただ独り生きたまま倒れこみ、誰も私が生きているとは思わなかったでしょう。私の感覚はすべて麻痺していましたので、敵軍についてこれ以上のことを語ることはできません。しかし暗い靄に包まれていた眼に光が戻ってきた時、夜のように暗く、ぼんやりとした視界の中に小さな揺れる炎が映し出されたのです。

〔二十六〕物の形を素早く認識することもそのときの私にはおぼつかなくなっていたのですが、眠りから覚めたばかりの人がするように目を開けたり閉めたりして見ていると、次第に傷の痛みが身にしみるようになってきました。裸の地面から上がってくる冷えと、空から降り注ぐ夜の厳しい寒気が痛みを増していたのです。

〔二十七〕かの炎の輝きはかすかな呟きを伴ってだんだんと私のほうに近づいてきて、私の傍に来ると、止まりました。私がやっとのこと

で重たいまぶたを開けると、そこには長い襦袢を来て、手に蝋燭をもった二人の老人の姿があり、一人が私に言ったのです。《おお、息子よ。義なる者を救われ、人の祈りよりも先に恵みをもたらされる御方を信じなさい。》

〔二十八〕このようなことを言うと、つぎに私の上に手を伸ばして祝福の詞を述べ、恭しく、ゆっくりとした口調で何かを呟きましたが、その言葉を私はよく聞き取れず、ほとんど解しませんでした。そして《体を起こしなさい》と言われて、健全な人のように素早く起き上がり、傷の痛みを感じず（ああ幸いなる奇跡）、それどころか失われていた活力が体に満ちていくのを感じたのです。

〔二十九〕私は驚いて、老人たちを再び見ました。私の魂は驚きのあまり、何か確かで、真実なのか、判断がつきませんでした。老人の一人が言いました、《疑念に囚われた者よ、何を驚き、血迷っているのか。そなたは本当の肉をまとった人間を見ているのだ。我々はイエスに使える者であり、誘惑と偽りの快楽で満ちた世界を捨てて、この山中の孤独な土地で暮らしている隠者だ。

〔三十〕全ての地の支配者であられる主は、そなたの傷を癒す者として私を選び給うた。〔私のごとき〕賤しき者を介して、主は価値ある奇跡が起こるように計らい給う。気高き魂を宿していた肉体が葬られず放置されることも、主は欲せられないだろう。その肉体は輝きを得て、軽くなり、不滅となったとき、魂を再びうちに宿すのだから。

〔三十一〕肉体とはズヴェーノの遺体に他ならず、その武勇にふさわしい墳墓が建立されなければならないのだ、後世の人々にも示され、かれらが祈りをたむけるに足りる立派な墳墓が。さあ、星々を携えた天空を見上げよ、輝く太陽のように明るい星が見えるか。あの星から放たれる煌めく光がそなたを導き、高貴な隊長の遺体をそなたに示すのだ。》

〔三十二〕私はその時、輝かしい星、否、夜の太陽から一筋の光線が降りてきて、ズヴェーノの遺体が横たわる場所へ伸びていくのを見たのです。それは筆によって描かれた金色の線のようで、ズヴェーノの遺体に強い光線を投げかけました。すると、その傷口がすべて燦然と輝いたので、血だらけの死体が散乱する戦場にあっても私は、かれの遺体をすぐに見つけることができたのです。

〔三十三〕ズヴェーノはうつ伏せではなく、顔を空にまっすぐ向けて倒れていました。願い事をかれはいつも星に向かってしていたのですが、〔死に際しても〕天に願いをかける人のようでした。右手は閉じられ、握った拳に剣を持ち、敵に斬りかかろうとするかのようでした。胸に置かれた左手は、畏れ敬いつつ、神に赦しを求めているように見えました。

〔三十四〕私は自分の涙でかれの傷を洗い流しましたが、私が心の傷を消し去ることができないでいると、かの聖なる老人がズヴェーノの右手を開いて、その手に握られていた剣を取って、私に向かって言ったのです。《この剣は今日、敵に多くの血を流させ、まだその血で濡れている。そなたが見ても分かるように名刀で、おそらくこの剣よりも価値がある剣は他にないだろう。

〔三十五〕最初にそれを所持した者が非業の死を遂げた今、天に座される御方は、そなたがこの場所で無為に時を過ごすことを望み給わない。この剣をそなたは、ズヴェーノに劣らぬ力と技をもって、ズヴェー

ノよりも長くにわたり使い、立派な功を立てることのできる勇敢な武者に手渡すのだ。ズヴェーノの仇討は、この剣に期されているが故、その新たな所持者に果たさせるのだ。

〔三十六〕ズヴェーノを倒したのはソリマーノであり、ソリマーノはこの剣によって倒されなければならない。されば、そなたはこの剣を持って、高い城壁の周りに張られたキリスト教徒の陣地へ行くがよい。途中、見知らぬ土地で進路が再び阻まれることを、そなたは恐れる必要はない。そなたを遣わす神の無敵の右手が、そなたが悪路にあっても、そなたを導き給うであろうから。

〔三十七〕神はそなたの声が失われぬよう計らい給うた、そなたの愛しき主君のうちに宿っていた信仰心や勇気や闘志が、その声によってキリスト教軍に伝えられるように。そなたの話に感動した者たちが真紅の十字架に象徴される戦いに参加し、現在のみならず、将来にわたっても、ズヴェーノの功がかれらの高潔な魂を燃え上がらせるように。

〔三十八〕そなたはいまや、この剣を誰が引き継ぐのか知るべきであろう。リナルドこそはその者であり、剣の腕前においてこの若者を凌ぐ者はいないのだ。そなたはかれにこの剣を渡して、告げるのだ、神と人々が崇高なる復讐の実行者としてかれ一人を選んだと。》老人の話を私は注意深く聞いていたのですが、そのとき不思議なことが起こったのです。

〔三十九〕ズヴェーノの遺体が横たわっていたところに――如何なる理由や技によるのか分かりませんが――立派な墳墓が突然現れて、墳墓の中に遺体が包みこまれていくのを見たのです。墳墓にはそれを見る人のために戦死した騎士の名前や功績も簡潔に記されていて、墳墓の大理石や碑文に感銘を受けた私は、そこから視線を逸らすことができませんでした。

〔四十〕老人は言いました、《そなたの指揮官の遺体は忠実な部下とともにここに埋葬されるだろう。そしてかれらの善き魂は天で神の愛を受け、永久に輝かしい栄光に包まれるだろう。そなたは涙でもって最後の別れをかれらに告げたのだから、いまや休まないといけない。新しい光がそなたを明日旅へと誘うまで、そなたは私の客となるがよい。》

〔四十一〕こう言うと、老人は高地や暗い道を進み、私は気力を振り絞ってその後について行きました。私たちは人跡未踏の岩場に着いた時に歩みを止めましたが、岩肌には奥深い洞窟が口を開けていました。老人は熊や狼も出没するこの洞窟に弟子とともに住んで、無防備の胸を鎧や楯ではなく、無邪気な信仰心で守って穏やかに暮らしていたのです。

〔四十二〕私が体を休め、元気を回復することができるよう、老人は野で摘んだ食物と堅いベッドを洞窟の中に入った私に与えてくれました。しかし東の空に赤みと金色を帯びた朝の光線が射すと、二人の隠者はすぐに起き上がり、祈りの務めを厳かに始めたので、私もいっしょに祈りました。それから聖なる老人に別れを告げ、かれの命令に従ってこの場所にやってきたのです。」

〔四十三〕ゲルマン人の兵士が話し終わったので、敬虔なるブリオーネがかれに答えた。「騎士よ、汝は辛く、痛ましい知らせをわが軍に伝えてくれた。汝の動揺と悲しみはかかる次第においては至極当然だ。われらのかくも勇敢な仲間たちは僅かの時間のうちに命を落とし、僅

かの土の下で眠ることとなった。汝らの指揮官は稲妻の如く、一瞬のうちに、現れたかと思うと消えてしまった。

〔四十四〕だが、それが何だと言うのか。かような死と殺戮は領土や黄金の獲得よりもはるかに幸いではないか。古のカンピドーリオにおいても、かくも輝かしい栄光の印が勝利者に授けられたことはなかった。かれらは天上の光輝く神殿で、かれらの勝利を称える不滅の冠を頭に抱き、各々の者がおのれの傷を周囲の人々に見せて、その傷を誇っているにちがいないと私は思うのだ。

〔四十五〕だから、地上で労苦や危険とともにあり闘うことをまだ余儀なくされている汝は、かれらの勝利を素直に喜び、晴れやかな表情をしてもよいのだ。ベルトルドの息子のことが気がかりなようなので、言っておこう。かれはわれらの陣営を離れて、放浪している。かれについての確かな情報が得られるまでは、当てもなく探しに行かぬことが得策だ。」

〔四十六〕二人のこうした話を聞いて、他の兵士たちはリナルドのことを想起し、思い偲んだ。一人が言った、「ああ、かの若武者はいまや異教徒たちの間を渡り歩いているだろう。」そしてほとんど皆がリナルドの偉業の数々を思い出してはデンマーク兵に競って語り、或る者はリナルドの武勲を描いた長い織布を披露して、熱っぽく弁を振るった。

〔四十七〕さて、その場にいた者たちがリナルドに想いを深く馳せていたとき、一団の兵士たちが戻ってきた。かれらは食糧確保のために平素から周辺の村に派遣される者たちで、略奪した多くの羊や牛の群れを引き連れ、さほど大量ではないものの、穀物や、自軍の馬たちの旺盛な食欲を癒すための飼料を運んできた。

〔四十八〕兵士たちは嘆かわしい出来事の確かな証拠になると思われる物を持ち帰った。それは善良なるリナルドの血が付いた上着と破壊された甲冑の一部であった。さまざまな、そして根拠のない噂がすぐに広がった（誰がこのような情報を隠しておけただろうか）。心配した兵士達がリナルドについての情報を得るために、また証拠の品を見るために駆け寄ってきた。

〔四十九〕かれらは立派な甲冑の大きな断片と、その甲冑が発する輝き、そして甲冑に描かれた鷲、すなわち羽ではなく、太陽によってわが子を認識する鳥を目にして、〔甲冑がリナルドの遺品だと〕悟った。覇をかけたこれまでの戦でこの甲冑を身を包んだリナルドが先頭をきって、もしくは単独で突進する姿を度々見ていたが、その甲冑がいま血に塗られて無残な姿で横たわっているのを見て、憤り、嘆いた。

〔五十〕リナルドの死因について兵士たちの間ではさまざまな推測がなされた。敬虔なるゴッフレードは自らのもとにアリプランドを呼んだ。この者は略奪部隊の頭であり、柔軟な思考力をもち、誠実にはきはきと話す男であったが、そのかれにゴッフレードは尋ねた。「良いことも悪いことも隠さずに言ってくれ、如何にして、何処で、君はこの武具を発見したのか。」

〔五十一〕アリプランドは答えた、「飛脚が二日で歩けるくらいの距離ここから離れ、ガザの街との境界に近い地域に、少し街道から離れて、山に囲まれた小さな盆地がございます。山に源流を発する一本の小川がその盆地をゆっくりと、方々の木立の間を縫って流れているのですが、その流域は木々や深くて暗い藪で覆われているので、格好の待ち

伏せ場所になっています。

〔五十二〕我々はそこに身を潜め、岸辺の草を食べにくる動物を仕留めようとしていました。すると水辺の赤く血で染まった草の上に、ひとりの兵士の遺体があるのを見たのです。遺体は汚れていましたが、武具や紋章を見て我々は皆、それが誰の遺体であるかを理解し、愕然としました。私は近づいて顔を確認しようとしましたが、首から上は切断されていました。

〔五十三〕右手もまた失われ、大きな胴体には背中から胸にかけて多くの傷がありました。少し離れたところに脱ぎ捨てられた兜があり、その表面には白い羽を広げた鷲の印が入っていました。私が誰か事情を知っている者を探していると、ひとりの農民がそこにやって来たのですが、その農民は我々に気づくとすぐに向きを変え、その場から逃げようとしました。

〔五十四〕しかし我々に追いかけられ、捕らえられると、我々の求めに最後は応じて言いました。この男は前日森から多くの兵士達が出てくるのを目撃し、そのとき身を隠したそうなのですが、かれによると、兵士たちのひとりは切断された人間の頭を持ち、掴んだ金髪の髪には血がこびりつき、よく見るとそれは若者の頭部のようで、顎髭はありませんでした。

〔五十五〕その後、同じ兵士が手にした人間の頭部を絹の布に包み、馬の鞍に吊るしたのを、男は見たのです。その身なりから推測して、兵士たちはキリスト教軍の者たちと思われる、と男は言いました。私は遺体から甲冑を外し、〔キリスト教徒がリナルドを殺したのではないかという〕疑念に心を痛めつつ、遺体を丁重に埋葬するよう指示して、甲冑を幕営に持ち帰ることにしました。

〔五十六〕しかし尊き遺体が私の推測する方のものであれば、墳墓をもう一つ建設し、儀式も執り行う必要があるでしょう。」アリプランドはこう言うと、他に証言すべき確かな事実もなかったので退いた。ゴッフレードは事態を重く受け止め、溜息をついたが、邪推であるようにも思われたので、切断された胴体と不義なる犯人についてのさらに確かな情報を得ようとした。

〔五十七〕そのうちに夜の帳が下り、空の広大な野が夜の翼のうちに包み隠され、魂を安息へと、諸悪を忘却へと導く眠りが、己の魅惑で兵士達の不安や疲労を和らげていった。アルジッラーノ[七]よ、おまえだけが無慈悲な苦悩が放った鋭い矢で射ぬかれて、恐るべき謀を思いめぐらし、乱れた心を鎮めることも、目を甘美な眠りへと誘うこともできないでいた。

〔五十八〕この男は喧嘩を好み、大胆な口をきき、激しく荒い気性の持ち主であったが、トロント川の流域で生まれ、市民たちの憎悪と怒りが渦巻く紛争にまみれて育った。祖国から追放されると、海浜地域や山間部で蛮行を繰り返し、祖国を侵略した。その後、アジアにおける戦いに参加し、その過程で手柄を立てて功名をあげていた。

〔五十九〕夜が白みがけるころに漸く転寝したが、転寝はまろやかな睡魔に襲われたのではなく、かれの精神にアレットが吹き込んだ虚脱感によるもので、それは死にも劣らないほど強く重いものだった。かれの精神は麻痺してしまい、かれが寝ている間も、休まることがなかった。というのも、この残忍な魔物は〔かれの夢の中に〕恐ろしい姿で現れて、かれを怖れ慄かせたからである。

〔六十〕〔かれの夢の中には〕頭部を欠き、右手の腕も切断された頑強な胴体が現れ、その左手には血で汚れ、灰のように青白くなった人間の頭が握られていた。その死んだ男の顔が呼吸をし、溜息まじりに語り、喘ぎ、血を吐きつつ声を発した。「逃げるのだ、アルジッラーノよ、もう夜が明けかかっているではないか。忌まわしい陣営と邪悪な司令官から離れるのだ。

〔六十一〕わが同胞たちよ、私を死に至らせた凶暴なるゴッフレードの謀から、誰が君たちを守るというのか。この裏切り者は憎しみを募らせ、私に続いて君たちまでを殺すために、策を練っているのだ。しかし、君が剣によって誉を得ようと思い、腕前に自信があるならば、逃げるべきではない。暴君を討って、その悪しき血でもってわが魂を鎮めるのだ。

〔六十二〕私は剣と怒りを授ける影として、君の傍らに付き添って、君の右手と心を強固なものにしよう。」こうかれに言うと、それを聞いたかれの心には怒りで満ちた新たな闘志が湧き上がった。眠気を吹き飛ばし、錯乱したかのように、怒りと毒で膨れた両目をぎょろつかせ、武具を身に付けるや否や、イタリア出身の兵士たちを異常なほど急かせて呼び寄せた。

〔六十三〕善きリナルドの武具が掛けられている場所に兵士たちが集まると、怒りや〔夢の中で〕増長された嘆きを言葉に込めて誇らしげに話し始め、語ることによって己の心を鎮めた。「されば、理性を侮蔑し、信仰心をもたず、飽くことなく血と黄金を追い求める野蛮で傲慢な輩は、われらの口に轡を、首には頸木を付けようとしているのではないか。

〔六十四〕我々はすでに七年間不当な従属を強いられ、苦しみと屈辱に耐えてきた。その程度たるや、イタリアとローマをして今後千年間、名誉回復と憎しみで燃え上がらせるに十分なもの。シチリアが勇者タンクレーディの軍勢と機智により平定されたにもかかわらず、いまや背信のフランク人[八]によってその地が治められ、武勇に対する褒美が詐欺師の懐に入っていることを、私は語るまでもないだろう。

〔六十五〕私が語るまでもないだろう、何処かで、また何時においてか、腕利きの兵、思慮深い兵、闘志あふれる兵が必要とされたならば、我々の誰かが剣と松明を携えて、真っ先に血なまぐさい戦場に駆け付けたことを。そして平和が回復され、栄誉や略奪品を分ける段になると、我々には何一つ与えられず、奴らが戦利品や名誉や土地や黄金を独り占めしたことを。

〔六十六〕こうした侮辱を我々が重大で、看過しがたいと思ったこともあったかもしれないが、それらは今や恐ろしく非道な蛮行がそれらを取るに足らないものとしたがゆえに、問題視するに値しなくなった。奴らはリナルドを殺し、人間の掟とともに、神の聖なる掟も侵した。それでも天罰が下らぬと言うのか。地下の永遠の闇に奴らが落ちないと言うのか。

〔六十七〕奴らが殺めたリナルドは、我々の信仰にとっては剣であり、楯であった。そのかれは、誰にも仇をとってもらえず、今でも倒れたままだ。奴らは埋葬もせずに、裸の大地の上に遺体を打ち捨てた。残酷な殺人者を、諸君は探し出そうとしないのか。その正体は、諸君、明らかではないか。ラテン人[九]の武勇をゴッフレードとバルドヴィーノがどれほど妬んでいるか、皆が知っているのであれば。

〔六十八〕だが、如何なる証拠を私に示せと言うのか。天に誓って証言するが（我々の言葉を聞く天を私が騙せるはずもない）、夜が明けかかる頃に私は見たのだ、彷徨い続ける、悲しげな〔リナルドの〕亡霊を。ああ、何と哀れで、痛ましい様だったことか。ゴッフレードの如何なる企みを、亡霊は我々に伝えようとしていたのか。私は亡霊を見た、夢ならぬ現実において。目を今どこに向けても、亡霊の姿が眼前に現れる。

〔六十九〕我々は今どうするべきか。かくも非道な殺人の罪で汚れた男の指示に、我々はまだ従うのか。それとも奴のもとを去って、ユーフラテス河が流れる地へ行くのか。その河は肥沃な平野にいる戦いとは無縁の民のために、そして我々のために、多くの都市や田園を成長させ、繁栄させている。その地が我々の領土とならんことを。我々によるその地の統治にフランク人が介入せぬことを。

〔七十〕我々は潔癖で、高貴な血の恨みを晴らさずして（それが諸君の望みならば）、この場所を去るしかない。尤も諸君が、いまは冷たく萎えている闘争心を然るべく奮い立たせるのであれば、かの毒蛇のごとき奴を、われらラテン人の誇りであり華である者を貪った廉で八つ裂きにして殺し、記憶されるべき罪人として他の邪悪な輩に見せつけることもできるのだが。

〔七十一〕諸君が自らの気高き闘争心を最大限に発揮せんとするならば、今日このわが手により、反逆の巣であるかの不敬な心に罰が下るように私はしたいのだ。」アルジッラーノは興奮しきった様子でこのように述べ、その狂気じみた熱弁に兵士たちは引き込まれた。「武器を、武器を」と半狂乱になったアルジッラーノが叫ぶと、心を熱くした若者らがその叫びに唱和した。

〔七十二〕かれらの傍でアレットが松明を振り回し、かれらの心に火を灯し、毒を注入する。怒りが、狂気が、罪深き殺意がどんどん膨らみ、勢いを増していった。かの病が忍び寄り、拡がり、イタリア人たちのテントから外に出て、ヘルヴェティア人たちに近づいて、かれらの心をも虜にすると、今度はイギリス人のテントに向かった。

〔七十三〕フランク人以外の兵士らを駆り立てたのは、全軍にとって大きな損失であったかの惨事のみではなかった。以前の紛争の原因も口実となり、新たな怒りに火を注いだ。抑えられていたすべての怒りが今や噴出し、兵士らはフランク人たちを邪悪な暴君と呼び、いまや中に込めるができなくなった憎しみを刺々しい脅迫のうちに露わにした。

〔七十四〕それは鍋の中で強い火を受けて沸騰する水がぐつぐつと音を立てて湯気を発し、遂には中にいられなくなって縁から飛び出し、泡をともなって吹きこぼれるようであった。真実によって心が照らされた兵士は少数で、熱狂する兵士たちを抑えることができなかった。タンクレーディやカミッロ、グリエルモら幹部級の者たちは騒動から離れたところにいた。

〔七十五〕暴徒と化した兵士らが武器庫に慌ただしく駆けて行き、戦意高揚の曲を奏でる扇動的なラッパの音があたりに響き渡った。その間敬虔なるブリオーネのもとには、武装を促す言葉を叫びつつ、部下たちが方々から駆け寄ってきていた。誰よりも先に武装したバルドヴィーノが司令官の傍に付くと、その警護を自ら引き受けようとした。

〔七十六〕自らに対する告発を聞いた司令官は天を見つめて、いつも

のごとく神に向かって祈った。「主よ、あなたはわが右手がどれほどわが軍の流血を憎悪するかご存じです。されば、かの兵士たちの心を覆うヴェールを取り除き、常規を逸脱したかれらの激情を静め給え。そして天界では周知のわが潔白を、盲目なる者たちが解するように計らい給え。」

〔七十七〕こう言うと、生気を帯びた不可思議な熱が自らの体内に天から降り注ぐのを感じた。湧き上がった気力と自信がかれの顔に満ちていき、かれを大胆にしていった。かれは部下達と共に、リナルドの仇を取ろうとしている者の方へ向かったが、周りで武器の音や脅しの声を聞いても歩みを遅らせることはなかった。

〔七十八〕胴鎧を着け、普段は身につけない豪奢で、堂々とした外套を羽織った。武器は持たず、兜も付けなかったので、かれの顔は天の威厳が感じられる稀有な光を受けて輝いた。かれは黄金の笏を振りかざし、この笏のみを使って、かの反乱の勢いを止めようとした。こうした姿で兵士たちの前に進み出ると、人間のものとは思われない声で語りはじめた。

〔七十九〕「何と愚かな脅し文句、何と虚しい武器の音が私の耳に今届いているのか。誰が首謀者なのだ。長い期間に積み上げた功績によって私は当地で栄誉を授けられたが、このゴッフレードは裏切りの廉で疑惑をかけられ、告発されるほど信頼されていないのか。その告発を不当と思わない者がいるのか。君たちはもしや、私が君たちに跪き、弁明し、謝罪するのを待っているのか。

〔八十〕ああ、私の名が鳴り響いている土地でこのような面目失墜が知らないことを願う。この笏や、私が成し遂げた偉業の記憶や、真実が、私を擁護してくれることを願う。今の事態にあって正義が憐れみに譲歩し、罪人に罰が与えられぬことを願う。他の功績に免じて、そして君たちのリナルドの名に免じて、この過ちを私は赦そう。

〔八十一〕策略を企てたアルジッラーノだけが自らの血で、策略に加わった全ての者たちの罪を洗い流すのだ。この男は根拠のない疑念に惑わされて、兵士たちを罪へと引き込んだ。」こう話す司令官の王者のごとき顔は、威厳の光と気品の輝きで激しく燃えていたので、仰天し、負けを認めたアルジッラーノはその（誰もが驚いた）怒りの形相に畏れをなした。

〔八十二〕先程まで司令官に侮蔑の言葉を投げかけ、狂気が用意した剣や槍や松明を好戦的な手に握って気勢を上げていた不敬で傲岸な兵士らは、（指揮官の力強い言葉を聞いて押し黙ったのみならず）畏敬と恥辱の念に駆られて顔を上げようともせず、自分たちにまだ護衛されているアルジッラーノが警吏によって捕らえられることを容認した。

〔八十三〕その様は、唸りながら威圧的な髭を震わせていた凶暴で高慢な獅子が、調教師の姿を目にしたときのようだった。無慈悲な心に生来宿っている獰猛性を抑えられた獅子が不名誉な束縛を受け入れ、調教師の脅しと絶対的な命令を怖れるようになった時、獅子に誇りを与えていた立派な髭や歯や爪は、その威力を失うのである。

〔八十四〕敬虔なるブリオーネの前に、翼を背中に付け、剣を手にした一人の騎士が立っているのを見た、という証言もある。厳しい表情をしたこの騎士は、毅然とした態度で司令官を擁護し、血がまだ滴り落ち、輝きを放つ剣を揺り動かしていたとされる。その血とはおそら

く、忍耐強い神をも怒らせた都市や国から流れ出たものであろう。

〔八十五〕こうして謀反は鎮圧され、各々の兵士は武器を置き、罪なる願望を武器とともに葬った。ゴッフレードは幕営に戻り、雑務を片付けつつ、新たな試みに一心に取り組んだかれは二～三日のうちにエルサレムの街を襲撃しようとしていたのであり、堂々として、威圧的な破壁車の中にすでに組みこまれた丸太を検査して回った。

第九歌訳

〔一〕だが地獄の大いなる怪物〔アレット〕はひと時燃え上がった激情と怒りが鎮まったのを見て、また運命に逆らうことも、普遍なる思し召しの決定に背くこともできないと悟って、〔キリスト教軍の陣営から〕飛び去ったのであったが、行く先々で肥沃な土地を干上がらせ、太陽をたちまち曇らせると、更なる諍いや災いを〔キリスト教軍に〕もたらすべく、せわしく羽を動かして新たな試みに取りかかった。

〔二〕アレットは――この怪物、ベルトルドの息子〔リナルド〕やタンクレーディや他の警戒すべき強者たちが〔キリスト教軍の陣営から〕離れているという報告を仲間の悪魔たちから受けていた――言った、「もはや何を待つ必要があろうか。今こそはソリマーノを密かにここに呼び、戦わせよう。結束を弱め、戦力を欠いている敵に対して、我々は必ずや（少なくとも俺はそう願うのだが）大勝利を収めるであろう。」

〔三〕こう述べると、漂泊の無法者たちを統率するソリマーノがいる場所に向かった。このソリマーノという男、神への反抗を試みた当時の輩の中でもひときわ凶暴で、その凶暴さたるや、かりに大地が新たな冒涜のために巨人族を再び生み出したとしても、その巨人族を凌ぐほどであった。トルコの王であったソリマーノは、ニチェーアでも統治者として君臨し、

〔四〕その支配はギリシャの対岸にあり、サンガリオ川とメアンドロ川に挟まれた地域、すなわちミシア、プリギア、リディア、ポントゥス、ビトニアの人々が住む地域を覆っていた。だが異国の軍団〔キリスト教軍〕がトルコ人や他の不敬なる民と戦うためにアジアに来たとき、かれは領土を失い、二度にわたる決戦でも敗北していた。

〔五〕しかし命運をかけた決戦で敗れ、故郷からも武力でもって追放されたので、エジプト王の宮廷に身を寄せた。高潔で、礼儀正しいエジプト王はソリマーノを客人として迎え、かくも強力な武将が崇高な企て――エジプト王はキリスト教徒軍によるパレスチナ奪回を阻もうとしていた――のために自らと手を組もうとしたことを喜んだ。

〔六〕だが、キリスト教徒軍に対して宣戦布告を公式に発布する前に、エジプト王はソリマーノに金銭を十分に与えて、アラブ人たちをその金で雇い入れるよう求めた。実はソリマーノがやってきたとき、エジプト王自身がアジアやアフリカで軍団を組織しようとしていたのであり、ソリマーノは貪欲なアラブ人たち――かれらはいつの時代においても盗賊もしくは傭兵であった――を簡単に自らの部下としたのであった。

〔七〕こうしてアラブ人たちの首領となったソリマーノは、ユダヤの各地に赴いて、略奪や強盗を働き、〔内陸にあるエルサレムに駐屯している〕キリスト教軍と海を結ぶ輸送ルートを遮断した。過去における敗北や失った領土のことを想起するにつけ、より大きなことをすることで〔キリスト教軍に〕復讐したいと願っていたが、その思いは漠

然としたもので、決心するには至っていなかった。

〔八〕このソリマーノのところにアレットは、高齢の老人に化けてやってきた。口から血を吐き、顔に皺をほり、口髭はそのままにしたが顎髭は剃り、頭を長い布で包み、衣は膝よりはるか下の足先まで垂らし、腰に短剣をさげ、背中に箙（えびら）を付け、手には弓を持った。

〔九〕アレットはソリマーノに向かって言った、「我々はいまや、略奪することも、輝かしい勝利を得ることもできないような、人気のない平原や砂に覆われた不毛の海岸を歩きまわっている。ゴッフレードはその間に、かの町〔エルサレム〕を襲撃し、その城壁を破壁車によってすでに破壊したというのに。町が陥落し、炎に包まれていく様は、もう少しすると、この場からも見えるだろう。

〔十〕ところでおまえは、焼け崩れた粗末な家と羊や牛の群れを、自分の栄えある戦利品とするつもりなのか。それによって、おまえは自分の王国を復興させ、自分が受けた侮辱と損失に対する仕返しをすることができると思っているのか。大胆になるのだ、大胆に。かの愚劣な暴君〔ゴッフレード〕を、やつが〔陣地を囲む〕柵の中にいる夜の間に襲うのだ。おまえのことを思う、この老アラスペを信用せよ。おまえは支配者であったときも、追放者となってからも、わしの忠告に狂いがないことを認識しただろう。

〔十一〕やつは我々が攻めてくるとは思っていない、我々のことを怖れてもいないし、武器を身に付けず、すぐに怖気づくアラブ人たちを心底から蔑んでいる。略奪と逃走を繰り返す民が大胆な行動に出るなどと夢思わないだろう。だが、おまえの荒々しい態度に刺激されたアラブ人たちは、武器を携えずに寝ているキリスト教軍に猛然と襲いかかるだろう。」魔物はこう言うと、燃え盛る激情をソリマーノの胸に注入し、風に紛れて飛び去った。

〔十二〕ソリマーノは手を空にかざして叫んだ、「おお、わが心に溢れるほどの激情を吹き込んだ方よ（あなたは人間の姿をして私の前に来られたが、人間ではあるまい）、私はあなたの導きに従います。私はあなたについて行き、いまは平らな場所に、死に絶えた者たちや負傷した者たちの山を作りましょう、そして血が流れる川も作りましょう。どうか私の傍にいて、闇の中で私の剣を操ってください。」

〔十三〕こう言うと、直ちに兵を集めて、弱腰の者や行動が遅い者には言葉でもって叱咤激励し、軍団全体が自らに従うようになるまで、自らの熱い思いを兵士ら伝えようとした。アレットはラッパを吹いて指示を出し、大きな軍旗を自らの手で風に靡かせた。軍団は足早に行進し、その速さは行軍の情報が〔キリスト教軍に〕伝わる速度を凌ぐほどであった。

〔十四〕アレットは兵士達とともに進んだが、やがて軍団から離れると、変装をして、伝令の男に化けた。そして世界が昼にあるとも夜にあるとも思われる〔夕刻の〕時間帯にエルサレムに到着し、〔キリスト教軍の襲撃に〕怯える人々の間を通ってエルサレム王の前に進み出て、〔ソリマーノに率いられた〕大軍の到着、作戦、夜襲とその時間や合図などに関する情報を〔エルサレム王の〕アラディーノに伝えた。

〔十五〕だが、赤みがかった靄でところどころが濡れ、染められた恐ろしい幕を、さまざまな物体の影はすでに広げ、大地は夜の霜ではなく、生温い血のような露で湿り気を帯びていた。空は魔物や不可思議な現象で満たされ、邪悪な亡霊が大気を震わせつつ彷徨う音が聞かれ

た。プルートーンは〔悪魔たちの棲家である〕地下の深淵を空にし、地獄を覆っていたすべての闇の勢力を〔地上に〕投入した。

〔十六〕凶暴なるソリマーノはかくも陰惨な恐怖の中を通って、キリスト教軍の陣地に向かって進んだ。夜が自らの登攀路の半ばに達して急激な下降に転じる〔深夜零時の〕時間帯になった頃には、キリスト教軍の兵士達が警戒心を抱かずに眠っている場所から一マイルも離れていない地点に到達していた。その地点でかれは兵士達に腹ごしらえをさせ、一段と高いところから弁をふるい、敵陣急襲に向かおうとする兵士達を激励した。

〔十七〕「見るがよい、強さではなく、盗品を山と携えていることで名をはせた軍団を。あれこそはアジアの富を、その欲深い胸の中に、海の如く呑みこんだ軍団。いま幸いなる力が働いて、諸君は〔諸君の身に危険が降りかかる心配をせずして〕あの軍団を与えられることとなった。武具も、紅色の布や金で飾られた馬も諸君の戦利品となり、奴らは抵抗できないのだ。

〔十八〕かの軍団はペルシャ軍やニチェーア軍を打ち破った軍団ではない。と言うのも、非常に長期間にわたり、さまざまな局面を含んだ戦争において、兵士らの大部分は戦死するからだ。たとえかの軍団の人命が〔過去の戦で〕失われなかったとしても、奴らはいま深い眠りについていて、武器も携えていない。眠気に屈する者は直ちに破滅するのであり、眠りから死へ至るのは容易いのだ。

〔十九〕さあ、さあ、ついて来るのだ。俺が最初に柵を越えて、眠っている敵兵たちに襲いかかる道を開くぞ。俺の剣さばきを見て、諸君は敵を斬り、惨殺する術を学ぶのだ。今日こそはキリストの王国が滅び、アジアが解放され、諸君が有名になるのだ。」こう言って兵士らを目前の戦いへと駆り立てると、黙って兵士たちを先導した。

〔二十〕ところが敵陣に接近する途中、弱い光を含んだ闇の中でキリスト教軍の歩哨たちに遭遇し、敵の賢き司令官〔ゴッフレード〕に不意打ちを食らわすという、自信を持って練った当初の作戦を断念せざるを得なくなった。歩哨たちは大勢の兵を引き連れたソリマーノを発見して、大声を発しながら〔自軍の陣地を目指して〕来た道を引き返した。その声を聞いて警備隊の第一列の兵士らが目を覚まし、戦闘の準備に全力で取りかかった。

〔二十一〕するとアラブの兵士たちは、いまや自分たちの存在が敵に悟られたと思い、粗野なラッパを吹き鳴らした。物凄い叫び声と馬のいななきが、馬の蹄の音とともに空へ上がる。高い山々が唸り、谷も唸り、その唸りに対して地獄が唸る。アレットはフレジェトンテの火を抱いた松明を高く掲げて、〔エルサレムの町がある〕丘の上にいる者たちに合図する。

〔二十二〕ソリマーノは先へと進み、まだ慌てふためいて、抗戦どころではない歩哨たちに追いついた。ソリマーノの猛進は、山中の洞窟から猛烈な勢いで噴き出す風をも凌ぎ、その勢いときたら、家屋とともに木々をなぎ倒す川や、塔を倒して炎上させる稲妻や、人々を恐怖に陥れる地震などを取るに足らないものと思わせるほど激しいものだった。

〔二十三〕振り下ろされた剣は相手を必ず捉え、捉えたならば相手に必ず傷を与え、傷を与えたならば相手を必ず絶命させた。描写をさらに続けたいところだが、真実〔を述べようとする人〕は嘘の顔を呈す

るものなのだ。ソリマーノは相手から傷つけられても――そのとき相手の剣を受けたかれの兜は鐘のように鳴り、熱い火花を強烈に発したのだが――何食わぬ顔を装うか、嘆きの言葉を抑えるか、あるいは傷に気づいていないかのようだった。

〔二十四〕ソリマーノが一人でかの第一列に属するフランク人たちを今にも敗走に転じさせようとしていた時、アラブ人兵士たちが、多くの川が集まって引き起こした洪水のように押し寄せた。優位に立った者は逃げる者たちといっしょになって進み、かれらとともに柵を越え、あたり一面で破壊や蛮行や殺戮行為を繰り広げた。〔続く〕

註

一　原作の *Gerusalemme liberata*（トルクワート・タッソ著、全二十歌）は第一次十字軍の史実に取材したイタリア文学を代表する作品のひとつである。今回訳出した第八歌は内容的に三つの段に分けられよう。すなわち一節から四十六節迄（ズヴェーノの軍勢が全滅した次第が生き残った兵士によってゴッフレードに語られる）、四十七節から五十六節迄（リナルドのものと思われる血が付いた武具がキリスト教軍陣営にもたらされる）、五十七節から八十五節迄（アルジッラーノがイタリア人兵士を集めてゴッフレードらフランス人兵士に対する蜂起を試みる）である。第九歌は全九十九節であるが、紙面の都合で今回は二十四節までを訳出する。第八、第九、第十歌はこの作品の主要な登場人物があまり姿を現さず、唯一存在感を示すのがイスラム側の救世主ソリマーノである。それゆえ本稿の表題は必ずしも第八歌と第九歌の内容を集約したものではないが、「ソリマーノの段（一）」とした。

二　古代ギリシャ神話における三人の復讐の女神（エリーニュス）の一人アレクトー。

三　第八歌三十六節で最初に言及されるソリマーノ。

四　第四歌一節で言及された冥界の王プルートーン（ルチーフェロに同じ）。

五　ズヴェーノの軍で唯一生き残ったこの騎士は、四十三節では「ゲルマン人の騎士」、四十六節では「デンマーク人」と呼ばれている。第十四歌二十七節以下で再度登場し、カルロと呼ばれる。

六　十字軍史記に記された歴史上の人物をモデルにしている。

七　歴史上の人物ではないとされる。

八　「フランク人」は通常キリスト教軍全体をさすが、ここではフランス人のバルドヴィーノをさす。

九　イタリア人のこと。